

〔研究ノート〕

「看護の社会的役割」に関する一考察 ナイチンゲール及び『季刊総合看護』の看護分析を通じて

武分 祥子*

本稿は、フロレンス・ナイチンゲールの看護及び『季刊総合看護』分析を通じて、現代における「看護の社会的役割」を考察し今後の課題を導き出したものである。「看護の社会的役割」とは、QOLを前提とした健康を護る専門職としての活動を行うことである。すなわち、かけがえのない生命を護り、個々が持つ自然治癒力を高めるような取り組みを指す。そのための21世紀における課題として、看護を取り巻く他専門領域との活発な交流が挙げられるのではないか。心理、教育、福祉などとの相互交流を通じて視野を広げ、実践及び研究を深めていくことで看護は新たな道を切り開くことになるだろう。

キーワード：フロレンス・ナイチンゲール，社会的役割，QOL，自然治癒力

はじめに

看護は、社会の影響を受け変化するものであるが、戦後日本においてもそうであった。

保健師助産師看護師法・第5条によれば、看護師とは、「療養上の世話又は診療の補助を行なうことを業とする者」¹⁾と規定されているが、実際にはこの枠にとどまらない、社会と広く関わる役割を果たしてきたのではないだろうか。

現代社会の急激な変化に伴い、看護も様々な影響を受けて変化し、それを基礎に今日の看護が形成されている。特に、戦後の著しい産業構造の変化及び経済変動によって、人々は社会についても個人の生活に対しても、その将来像を明確に描くことが困難な現状といえる。

そうしたなか、社会が求める看護の役割も多様化してきていると見てよいであろう。つまり、今日社会が求める看護は、QOL (quality of life: よりよく生きること)²⁾を包含した幅広い領域に関わるものである。よって看護において、これまでも視野にはあったであろうが注目されてはいなかった新たな役割が期待され、それを担うことが求められている。実際に、今日の看護は病気をめぐる医療の領域という枠を超え、高齢者の援助を中心とした社会福祉の領域、つまり介護の領域において重要な役割を担うようになった。

また今日、医療及び福祉において「サービス」「利用者」という概念が浸透し、効率的で高度な技術に基づくことが優先されている。看護も例外ではない。看護における「質」の主軸はリ

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

スクの少ない、高度な看護知識と熟練による「看護技術」である。そしてこの「看護技術」の経済的評価の追究が主流である³⁾。しかし、看護が従来から大切に看護してきた人間をみるという視点を今日問い直さねばならないのではないか。

そこで、現代看護において普遍的なことは何かを分析することから「看護の社会的役割」を考えたい。そのために本研究では、フロレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale、以下ナイチンゲールとする）の看護と雑誌『季刊総合看護』に掲載された論文を中心に分析を試みる。その上で、時代を経ても普遍的な看護の働きを検討する。あわせて「看護の社会的役割」を導き出し今後の課題を提起することを本稿の目的とする。

ナイチンゲールの看護

1. ナイチンゲール紹介

まず近代看護制度を樹立し、看護を専門職業として位置づけたナイチンゲールに学んでみたい。ナイチンゲールを取り上げるのは、現在の看護が彼女の影響を大きく受けて変遷してきたといってよく、今日改めて彼女の看護論を見つめ直す動きがあるからである⁴⁾。ナイチンゲールの看護を捉え直すことで、看護における普遍的なものが何かを考える。

なお、表1はナイチンゲールの業績と時代背景を整理するために作成した年表である。

ナイチンゲールは、1820年イギリスの裕福な地主家庭に生まれ当時の女性としては最高の教育を受けて育った。ナイチンゲールが看護の道に進んだ19世紀半ばは、看護を行うのは貧しく教養の乏しい女性とされていた。また病院

は病気の貧民を収容する施設であり不衛生と不道徳が混在し、上流階級の人々が嫌う場所であったという⁵⁾。こうした社会状況において家族を説得し彼女が看護の道に進んだのは1850年、30歳になってからである。看護教育を受けた彼女は、クリミア戦争の悲惨な状況を見ることができず、1854年トルコのスクタリに38名の看護婦と向かう。そしてイギリス陸軍の戦地病院で看護に当たることになる。ここでナイチンゲールが成し遂げた業績は、死亡率の引き下げをはじめ、回復した兵士のための教育や福祉にも及んだ⁶⁾。不衛生な環境を改善し負傷者や病人を救う上で、科学的な視点を育む看護教育と病院改革が必要であると彼女は痛感する。

イギリスに帰国後、36歳から生涯を閉じる90歳までの間病床に就きながらも、150点に及ぶ著作と1万2,000点もの手紙を残した。戦地からイギリスに帰国後、現代看護の基盤となる看護論をはじめ精力的に執筆活動を展開したことは一般的にはあまり知られていない。専門職業としての看護の必要性を社会に訴えと共に、病院について、建築について、福祉について、宗教について著すなど看護を取り巻く学問分野にも尽力し影響を及ぼした⁷⁾。今日、その膨大な論文や書簡などが看護関連領域の研究者に取り上げられ、今日的意義が見出されようとしている。

著書において、看護が19世紀後半に新しい専門職として世界に要求されてきたもので、病気ではなく病人に着目するところに医術と看護の違いがあるとした⁸⁾。そして病気は健康を妨げている条件を除去しようとする自然の働きであり⁹⁾、「看護は生きた身体と生きた心と、心身一体のあらゆる感情とに働きかけるのである」¹⁰⁾としている。そのために看護師は、理

表1 ナイチンゲール関係年表

年号	年齢	ナイチンゲールの出来事	社会の出来事
1820年	0	イタリア・フィレンツェで誕生	英・ヴィクトリア女王即位
1837年	17	家族と共にヨーロッパ旅行（2年間）	40年アヘン戦争
1850年	30	ドイツ・カイザースウェルト看護学校に2週間滞在（翌年約4ヶ月間看護訓練を受ける）	
1853年	33	ハーレイ街の淑女病院の監督となる	
1854年	34	クリミア戦争の戦地へ向けて出発、看護に当たる	クリミア戦争始まる
1856年	36	イギリスに帰国、ヴィクトリア女王に謁見し陸軍の衛生状態の改善について上申、陸軍衛生勅選委員会のために働く	クリミア戦争の講和調印
1858年	38	「英国陸軍の保健」「女性による陸軍の看護」「病院覚え書・第1版」出版 翌年「看護覚え書」出版	59年ダーウィン「種の起源」
1860年	40	聖トマス病院にナイチンゲール看護婦養成訓練学校を開設、翌年キングス・カレッジ病院に助産婦訓練学校を開設。	アメリカ南北戦争始まる 62年アンリ・デュナン「ソルフェリーノの思い出」出版
1867年	47	ロンドンの救貧院病院の看護改善にあたる、「救貧病院における看護」出版	ノーベル、ダイナマイトを発明
1884年	64	赤十字勲章を受ける	80年パスツール、ワクチン免疫に成功 82年コッホ、結核菌を発見
1892年	72	農村への衛生普及のための保健指導員の運動を始める、2年後「町や村での健康教育 農村の衛生」出版	94年レントゲン、X線を発見
1910年	90	睡眠中に没	

出所）薄井坦子訳『ナイチンゲール著作集 第二巻』現代社、1974年、366-372頁「フロレンス・ナイチンゲール関係年表」を参照し、筆者作成。

性的な関心と、病人に対する心のこもった関心と、病人の世話と治療についての技術的（実践的）関心という三重の関心（Threefold Interest）をもたなければならないという¹¹⁾。

ナイチンゲールの捉えた看護には、現代においても普遍的な看護の働きが示唆されている。第一に、看護が病気をみるのではなく病人、つまり人間をみるという点である。人間をみるためには身体だけでなく心にも注目しなければならない。現代医療は高度に発展し細分化され、各専門領域の研究は目覚ましい。例えば胃癌患者を考えた場合、病巣である胃の一部を手術により除去し癌細胞がなくなったとしよう。ここで患者自身が元気を取り戻そうという意志をも

って病気に立ち向かわなければ回復は望めない。つまり癌を切り取ったとしても、患者の心理的不安や苦痛が除去され、社会生活への復帰を目指す気持ちが育たなければ治療の効果があったとは評価できないのではないか。このように解釈すると、ナイチンゲールは病気だけをみるのではなく、人間全体をみるのが看護の特徴であることを示唆していることになる。

第二に、ナイチンゲールのいう三重の関心に注目したい。理性的な関心（Intellectual）と心のこもった関心（Hearty）と技術的関心（Technical/Practical）は相互に絡み合い、重なり合い発展するものであるとしている¹²⁾。これは、社会福祉におけるソーシャルワークの実

践との類似性が見出せる。ソーシャルワークの主要な構成要素として知識（Knowledge）、技術（Skill）、価値観（Value）が挙げられる¹³⁾が、知識と技術と心が必要であるとするならば、先の三重の関心の構成要素を連想させる。よってナイチンゲールの示唆した看護は、社会福祉にも繋がる考え方であると解釈できるのではないか。

ナイチンゲールは身体と心を両方みなければならない点を指摘し、そのための看護を行うことができるよう執筆を通じて当時の社会に働きかけた。そればかりでなく、看護教育や病院管理についても改革を試みた。さらには、看護に関係する他の専門領域にも繋がるような事柄も示唆していることが明らかにされつつある。これは、看護が他の領域との繋がりを持ちながら発展していくことを意味しているのではないだろうか。今後明らかにしたい課題である。

第三に、ナイチンゲールが自然治癒力（effort of nature to remedy）に基づいて看護論を展開した点を挙げる。このことについては次節で論じていきたい。

2. 自然治癒力を高めることの今日的意義

QOL との関係から

ナイチンゲールの論じた看護には、自然治癒力が大きく関係している。この自然治癒力を彼女はどのように捉えているだろうか。

ナイチンゲールは、病気とは回復過程であり、回復力、自然治癒力が人間の病気の回復に影響を与えているとしている。そして、すべての病気は回復過程であるとし、回復過程とは侵されたり、衰えたりする過程を癒そうとする上での自然の働きと定義している。そしてその回復過程において障害となるものを取り除き、環境を取り巻

くすべての事柄（空気、陽光、温度、清潔、静かさ、栄養など）に関して、患者の生命力の消耗を最小限にするよう整えることが看護であるとしている¹⁴⁾。

彼女の病気と健康の捉え方に注目したい。病気とは健康を妨げる条件を除去し癒そうとする自然の営みであり、健康とは人間が個人の持っている力を十分に活用できる状態ということになる。つまり、病気に伴って表出する様々な症状は、健康を維持しようとする人間のもつ自然治癒力を身体的反応でもって表出しているものと考えられる。この病気と健康の関係は、人間が生まれながらもつもので自然の法則に常に規定されている。彼女の著書にはnature（自然）を用いた言葉が多く用いられている¹⁵⁾。そしてこのnatureには実に奥深い意味が含まれている¹⁶⁾。本性、本質、性質、本然の力という意味もそのなかには確認することができる。

したがって、ナイチンゲールが意図するnatureの概念というのは、物質的な環境にとどまらず、人間の心、心と身体の関係をも含めたものであると捉えられる。彼女の追求する看護とは、このような人間本来の自然の力（自然治癒力）が健康を維持する過程で侵害、衰退なきように、一体化した生きた身体と生きた心に働きかけるものであるといえる。このnatureがナイチンゲールの健康の概念で大きな意味を持ち、看護のはたらきを捉えたものであるといえるのではないか。そして、病気を回復過程とし人間の本来持つ自然治癒力に注目した点は、現代にも通用する考え方なのではないだろうか。

1975年に日本における障害児療育の実践の中で、病気を治す主体は、患者自身であるということに社会に提唱した著書が出された¹⁷⁾。そ

の中で、病気を治していく上で患者自身の意欲と取り巻く環境の重要性を指摘し、治療方針を決定するのは自然治癒力や治そうとする意志をもった患者であることを論じている。そして自然治癒力は、治療の主体である患者自身が、病気を治そうという心をもたなければ働かないものであるとし、医療と教育両方が行われている療育施設における発達の保障を訴えている。

これは、先に述べたナイチンゲールが着目した、自然治癒力の働く過程と類似した考え方であろうと思われる。彼女の指摘した病気の回復過程は現代にも通ずる考え方であるといえよう。看護は、病気の回復過程において患者に接し、患者自身の持つ力を引き出すことなのではないだろうか。すなわち、患者の潜在能力（自然治癒力）を引き出し高めることを指すのではないか。

加えて現代の治療環境において、ただ病気が治るだけではなくQOLをも包含した治療過程が重要視されている。医療の領域において、特に癌などの末期治療における研究や取り組みに用いられることが多い。歴史的にみるとQOLは「蒸気機関が発明された頃のヨーロッパで、人生の意義を考える哲学的運動のシンボルとして使われた」¹⁸⁾という。そして現在、末期治療の領域ばかりでなく人間の生き方を考えていくという意味をも含めた幅広い概念で用いられるようになってきている。

今日医療現場においてQOLを評価する場合、身体環境や意識環境や医療環境、そして人生環境も含める研究活動も出てきている¹⁹⁾。病気の治療対象となるものは身体ばかりでなく、心も含めたものという捉え方がほぼ定着していると考えられる。看護においても癌患者や高齢者及び小児の看護などにおいて、対象患者のQOL

をどのように高めていくかといった研究や実践が数多くなされている。こうした現状において患者自身がどのような治療を望むか、その後の生活をどのようにおくるかなど、その人の社会的背景や退院後の生活環境をも踏まえた医療及び看護が期待されているといつてよいであろう。このように考えるならば、現代社会を生きる患者にとって、自然治癒力を高めることはすなわちQOLを高めることに深く関係していることになるだろう。こうした社会要求に応える看護は、人間のQOLを高めるための援助を目指すことになる。

ナイチンゲールが看護の働きとして捉えた患者の自然治癒力を高めることは、現代社会においても通ずることであり、時代を経ても普遍的看護の役割といえるのではないだろうか。そして看護は今日の社会において、患者のQOLの保障を目指すことが求められている。このように考えるならば、現代における看護の担う役割は、QOLを高めることに深く関連していると解釈できるのではないだろうか。

『季刊総合看護』における看護

1. 『季刊総合看護』を取り上げる理由

『季刊総合看護』は年4回発行（ただし、1966年と1967年は毎月発行）され、1966年から現在に至るまで40年近く「看護の本質」追求を試みてきた雑誌である²⁰⁾。

本誌の2003年公式発行部数は1万部とされている。他の看護雑誌の発行部数と比較すると決して多い方とはいえない²¹⁾。しかし、多くの雑誌が広告を掲載し発行を維持するなか、本誌は創刊から今日まで広告掲載なしという意志を貫いている。創刊以来順調な発行が続いている

のは、読者の支持の大きさも一因であると考えられる。また論文の執筆者は看護だけでなく、医療関係者をはじめ心理学、歴史学、教育学、栄養学などに及んでいる。加えて、海外看護の翻訳も手がけ、特にナイチンゲールの著作をいち早く日本に紹介してきたことがこの雑誌の特徴である。本誌発行元の現代社は、看護図書を専門に扱っている出版社である。連載された論文の多くは看護図書として出版されている。

筆者はこの雑誌の名称とその言葉の持つ意味に注目した。編集部は創刊時に、社会学的・心理学的な視点をも含めた“全人間”として総合的に人間を把握することが「総合看護」であるとしている。そして「総合看護」は正しい理論を支柱にした日常の業務の積み重ねから生まれてくるものであると表明している²²⁾。この考え方は、看護学だけでなく、視野を広げて看護を分析するという、人間をみるうえで重要な視点を示唆している。このことは、看護の本質と関わる内容であり、今日改めて捉え直す必要があると考える。

また、1966年創刊号の「編集覚え書」によると編集部は、「日常の業務の積み重ねのなかから看護本来の姿をつくりだす」とし、人間として患者をどう理解し看護するかに注目をしている²³⁾。

この雑誌を分析することで、編集部が目指す「総合看護」が概観でき、そのために必要な看護の視点が抽出できるのではないかと考えた。そこで、『季刊総合看護』の特集テーマを中心に分析を試みることから、看護にとって普遍的なものとは何かを考えていくことにしたい。ここでは、「遊び」「死」「教育」をめぐる論文を分析する。これらを取り上げることで、『季刊総合看護』編集部の意図した幅広い視野で看護

を分析するという方針の中身が捉えられると考えたからである。さらに看護と遊び、死、教育との関係を考えることは、医学以外の他領域との繋がりや重なりという新たな視点を見出す糸口になるのではないだろうか。

2. 掲載論文分析

「遊び」、「教育」、「死」に注目して

(1) 看護における「遊び」の有効性

まず、1983年第18巻4号で、特集として組まれたテーマ「看護と遊び」を取り上げる。

「看護と遊び」を取り上げるにあたり編集部は、「遊び」を病者への治療や看護のなかで生かすことを提案し、精神科及び小児科といった限られた領域だけでなく、どの病棟にも適用するものであると述べている。つまり、「遊び」を通して人間が心の自由を得たり、生き生きとしたり、また心豊かに過ごすことができるとしている²⁴⁾。

また、特集における論文「遊びのすすめ」において大森健一は、精神神経科医の立場から「遊び」の役割について論じている。「遊び」の特徴は、自由であること、日常性の枠外にあること、利害や効用と無関係であり、楽しさや生き生きとした状態をつくりだすことであるという。そして「遊び」を通じて「ゆとり」を得ることで、人間は現実を受け止めることができる。「遊び」が直接的な治療行為ではなくても、精神の健康を守るうえで大切であり、現状を乗り越えるための、一つの手段としての役割を果たしているとしている²⁵⁾。

こうした大森の言葉からは、「遊び」が患者の精神的な支えとしての役割を果たし、治療に効果があることが読みとれる。したがって、精神的な安定を図り患者との関係を構築していくた

めにも、看護において「遊び」を取り入れていくことが有効であると考えられる。

さらに、座談会「看護と遊び」において、医師、看護師（精神科、小児科）、臨床心理士の4人が「遊び」の有効性を述べている。「遊び」の一環であるサイコ・ドラマにより、自分が表出でき、また、「遊び」が自然発生的なものになっていったという。そして入院生活において、「遊び」が有効で、遊ぶことで患者は心のゆとりを持つことができる。その結果、精神的バランスが保たれ、二次的に病気回復に影響を与えることになる。また、「遊び」を通してのスキップが成長への志向と繋がり、患者同士や職員との相互理解を深めることになるという²⁶⁾。

以上より、「看護と遊び」についていえることは、患者自身が自分の気持ちを抑え込まずに表出できるような環境を整えることの重要性である。病院における治療環境は、日常生活と分断された緊張の場である。緊張の連続では自分らしさが出せず、精神的に不安定になることが少なくない。患者が自分らしさを失わず、治療に専念できるよう、リラックスした精神状態を保つことが、看護援助に求められているのである。つまり「遊び」の役割は、患者にとって有効なものとなるように治療環境を整えることであると考えられる。病院生活に潤いと精神的安定をもたらすものであると捉えられる。

しかし、今回筆者が『総合看護』で取り上げた遊びをめぐる論文に関しては、いくつかの検討課題が残る。それは、「遊び」以外で生活環境を整える可能性の有無、および「遊び」のマイナス面などに関してである。今後考察を加えていきたい。

（2）死に対する看護をめぐる

『季刊総合看護』1970年第5巻1号の特集として「死の床にある患者とともに」が取り上げられた。特集を組むにあたり編集部は、回復への援助と死への援助という、二方向の看護の連続性を指摘している。そこでは、死という極限状態の援助は看護にとっても限界状態にあり、この場で看護がもっとも純粋な形で出てくることが要求されると同時に、仕事の真価が問われるとしている²⁷⁾。

臨死の場は人間の究極の場でありながらも、看護にとっては最も看護の本質となるものが表れる場であるといえる。「生」と「死」は人間の当たり前の営みであり連続している。したがって、「生」に対する看護も「死」に対する看護も人間の当たり前の営みに対して行われるという点で繋がっている。看護は人間の一生に対する援助という一連の流れにおいて取り組まれるものであり、このことはどのような看護場面においても念頭に置かなければならないことであろう。

また、特集の中で取り上げられた論文の一つである、サラ・ロッチの「死に行く人のケア」においては、人間を恐がらせるのは死ではなく、死に至る過程であるとしている。その過程における看護師と患者の関わりが重要であり、看護師は患者の苦痛全体を形成している原因を観察・発見し、処理方法を見つけ出すことが仕事であるとしている²⁸⁾。

さらに、古庄富美子は「私が体験した危篤患者の看護」において、患者のありのままの状態を見ることに注目している。また、看護に当たる者は生きる力を信じ、共にありたいと思う心を持つことが必要であるとしている²⁹⁾。

これとは別に川上嘉明は「高齢者の死にゆく

過程をととのえる終末期のケアの視点」において、高齢者の死における生活の場、生活過程を整える援助の重要性を述べている。そこでは、死の過程は身体が機能を停止するだけではないと記している。人間の死は、不安や恐れからくる精神的問題、家族との別れからくる社会的問題、死や死後の世界からの霊的な問題を網羅するものであるとしている。こうした問題に対し、その人ができるだけ苦痛から解放され、安らかに生活を全うする援助を展開するホスピスについてまとめている³⁰⁾。

川上也指摘しているように、死の看護について考える場合、ホスピスにおける援助は学ぶところが大きいといえよう。ホスピス・ケアに関して石垣靖子は、チーム・アプローチにおけるホスピス・ケアのプログラムとして、徹底した症状のコントロールとコミュニケーションと家族への援助を挙げている。そのなかでの看護について、患者の痛みの原因を知ること、解決できる痛みもあると述べている³¹⁾。注目したいのは、患者の痛みの原因である。その痛みは前述したように、川上の死の過程で表出される問題（身体的問題、精神的問題、社会的問題、霊的問題）が原因となって出てくるものである。したがって、看護において痛みの原因となっている問題を明らかにし、緩和及び除去できるよう援助することが有効である。痛みの原因を突き止め、それにあった援助方法を考え、アプローチすることが看護であり、その過程において様々な角度から科学的に痛みの原因を追究できることが看護の特徴であるといえる。

看護において患者の死に対する援助は避けて通ることのできない出来事である。人間には必ず死が訪れる。その人がどのように死を迎えたか考えていくことも看護である。その人の生

命および人生について共に考え尊重していくことは、QOLの保障に関わる重要な事柄である。死への過程において患者の苦痛をできるだけ除去し、その人が精神的安定を得て死に臨むことができるよう援助することが看護に求められている。

（3）看護における教育の視点

『季刊総合看護』掲載論文を辿ると、「看護と教育」が特集としても、また連載においても取り上げられていることがわかる。そこで「看護と教育」について、どのような文献が掲載され、また見解を述べているかまとめてみることにしたい。

創刊号である1966年第1巻1号から、薄井坦子による「看護のための教育学ノート」の連載が始まった（全6回連載）。この連載で薄井は教育学を踏まえた上で、看護と教育との共通点について以下の4点を挙げている。第一に、自然発生的な実践活動があり、第二に、広範な学問分野との関わりがあり、第三に、基本的視点の転換（教育：教師中心から児童中心へ、看護：患者中心へ）が見られ、第四に、領域の拡大が起こった（教育：学校教育だけでなく、成人教育、社会教育、職業教育、自己教育。看護：病人を中心とした活動から予防活動へ）というものである³²⁾。

看護と教育に共通点として、どちらも実践に基づいた学問であること、互いに他領域の影響を受けながら発展してきたことは同意できる。例えば、教育と看護と、さらに保育は、家族機能から発生してきたものであり、生命活動を営む上で不可欠な点において共通している。家族機能から派生してきたものであるが、家族機能の外部化を進行させたものとして現代社会の発

展過程があるだろう。古来より営まれてきた家族機能の中の看護と現在の専門職としての看護の相違に関しては、さらに吟味する必要があるが今回は省略する。

また、教育は心理学の発達概念を取り入れた結果、教師中心から児童中心へという視点の転換が起こったという³³⁾。看護においても患者を中心として援助が展開され、発達との関係から人間をみることも試みられている。

1967年第2巻1号で薄井は、「教育活動は、看護活動も同様であるが、“このようになってほしい”という願いのもとに行われる意図的な実践活動である」³⁴⁾とし、看護と教育の共通点を述べている。以上の薄井の論文から、看護と教育が発生、実践活動、発達の側面において共通性をもつと考えることができる。

さらに、1983年第18巻3号の「編集覚え書」において、看護における「教育的側面」が指摘されている。編集部によると、看護には「その関わりの中で相手に気づかせ、勇気を与え、変化や成長を促し、相手を高めていくという側面がある」とし、「看護者にそうした眼が欠けていると、せっかくの援助がかえって“患者の成長をはばむ”ものになる」という。そうした点から看護と教育とが似通った性質を持つものであると記されている³⁵⁾。

これらの主張から、看護は援助過程において教育と多くの共通点を持っているように思われる。加えて、安静を保つための看護も教育的側面をもつと考えられる。看護師は安静の必要性を患者に解りやすく説明する。そして患者が理解する。このことは病氣回復に向けての患者に対する病識教育の一環ではないだろうか。

また『季刊総合看護』は、重症心身障害児の看護に関する論文を、特集テーマではないが多

く取り上げている。これらの論文において、治療と教育から成り立つ療育の重要性が指摘されている。よって本稿では、療育を教育の一環として取り上げ分析することにする。

なお、表2は『季刊総合看護』において重症心身障害児を取り上げた論文を一覧表にしたものである。

療育をめぐる論文が初めて掲載されたのは、糸賀一雄の「自己実現の教育 重症心身障害児教育の実践を通して学んだもの」(1969年)である。糸賀は、滋賀県の社会福祉施設・近江学園の園長として療育に取り組んだ。そのなかで、どんなに障害が重くても、誰もが個性的な自己実現をしていることを論じている³⁶⁾。このような糸賀らの実践を基にした療育が、看護の本質にとって重要なことを述べていると考えたからこそ、『季刊総合看護』が取り上げようとしたのだろう。この糸賀らの療育は、はじめは「杉の子組」から始まったが、のちに重症心身障害児施設建設へと繋がっていく。そして、建設されたのが滋賀県・第一びわこ学園である。

1995年には、第一びわこ学園の井口加代子の講演録「命の大切さを教えてくれた、びわこ学園の園生たち」が掲載されている。井口は当たり前のことを行うことが、家庭での子育てにも通ずると論じ、施設での園生との日々の関わりを記している³⁷⁾。

1973年には田口ヨウ子の神奈川県立ゆかり園での看護実践「脳性マヒをもつ子どもの看護の端緒として」が取り上げられている。ゆかり園は、リハビリテーションの先駆的役割を果たしてきた肢体不自由児施設である。田口はこの園での療育を通して、臨床看護と異なるリハビリテーション看護の難しさを「生活の場」という視点から展開している。愛情と深い理解

表2 『季刊総合看護』において重症心身障害児を取り上げた論文

発行年・号	論文名	著者
1969・2	自己実現の教育 重症心身障害児教育の実践を通して学んだもの	糸賀 一雄
1973・1	脳性マヒをもつ子どもの看護の端緒として	田口ヨウ子
	子どもたちと共に	阿部 孝子
	子どもたちとの日々	榭居 悦子
1973・2	「ゆうかり園の記録」を読んで	都 留春夫
	ゆうかり園の看護婦さんたちの記録を読んで	深津 要
	ゆうかり園を訪ねて	田村 真
1975・2	脳性マヒ児の臨床看護	若松 澄子
1976・2	重症心身障害児看護の日々 くり返し重ねられていく重み	若松 澄子
1983・1	ことばでないM君と心の対話ができた看護過程 重心看護への導入	森 ミツ子
1990・2	[講演録] 福祉の仕事の喜びと苦勞	安齋 忠治
	重症心身障害児施設での実践から	
1995・2	[講演録] 命の大切さを教えてくれた、びわこ学園の園生たち	井口加代子

出所)『季刊総合看護』を参考に、筆者作成。

の上に立った母性的養育が子どもの育ちを左右すると指摘している。そしてこの働きかけを地域社会へ広げて行く役割を担う者としての機能が、看護師独自のものであると述べている。すなわち、人間は本来、身体的要素と心理的要素が一体となったものであり、これを分けて考えるようになった医療・看護の問題性を指摘しているのである³⁸⁾。田口を含め、ゆうかり園での実践者が語らいの中で、一人ひとりの子どもの心の流れを追う全体性の大切さ、さらに、それをこま切れではなく、他の分野の見方も活用しながらみることの重要性も論じている³⁹⁾。

これら田口たちの実践には、障害児看護を通して捉えた看護の独自性である、個別のかつ生活における全体性の視点が挙げられている。また、日常の働きかけを地域社会へ広げていく看護師の役割も示唆している。加えて、現代医療及び看護の専門分化がもたらしたかもしれない問題点の一つ、身体的側面と心理的側面の分断が指摘されている。

1976年には若松澄子が、「重症心身障害児看護の日々 くり返し重ねられていく重み」の

中で、ことばに代わることばを返す子どもたちの姿を描いている。子どもにとって目標を設定できるような場が、看護によって整えられることの重要性を述べている。重症心身障害児の看護が、子どもを育てるということを基調とする看護の場であり、育児を通じて自然な援助を展開することの大切さを指摘している⁴⁰⁾。

療育にも繋がる重症心身障害児の看護は、当たり前前の生活を施設において実現させる取り組みを実践している。個人にとっての当たり前前の生活を保障することは一見、当然なことと思われる。しかし、実際は実現困難な状況にあるという、現代医療の矛盾を示唆しているのではないだろうか。

看護の様々な場面において教育的側面が登場する。教育との類似点があり、安静をめぐる看護での働きかけ、療育における看護での取り組みをみてきた。その中で、その人の生活を重視することが共通していたのではないか。その人の望む生活を保障することはQOLを保障することに繋がっている。そして、ここで取り上げられている生活は、社会に開かれた生活である。

患者の生活が病院及び施設内だけの隔離されたものであってはならないのである。

3. 『季刊総合看護』にみる看護

ここで改めて『季刊総合看護』にみられる看護をまとめると次のようになる。

第一に、生活環境を整える重要性が挙げられる。「看護と遊び」において、患者自身にとって自分を表出できるような環境を整えることが病気回復に有効であることを導き出した。そして看護に求められることは、患者が自分らしさを失わず治療に専念できる精神状態を保つことである。加えて、個人の生活を重視することは社会に開かれた環境を創造することも含まれる。患者の生活が病院及び施設内だけの隔離されたものであってはならない。その為に、幅広い視野を養い、地域との交流を目指した援助が必要である。

第二に、その人の人生及び生命について共に考え尊重していくこと、つまりQOL保障を重視していくことが挙げられる。死の過程において、患者の様々な苦痛を除去しその人がどのように死を迎えたいか一緒に考えていくことも看護である。また、回復過程においてその人が何を求め、どのような目標や将来を描いて治療に望むかについて、理解し支える援助も看護に求められている。

ただし、今回の『季刊総合看護』分析が、現代看護の全体像を現したものではないことに留意しなければならない。筆者は、本誌を取り上げたものの、分析においてはまだ途中経過にある。加えて、看護関係の文献を広く分析する作業も現代看護分析には必要であろう。このような分析段階であることを前提にして、以下の点を指摘したい。

総合的に看護をみようという編集部意図の中身は、看護をめぐる関係領域、例えば医学や心理学からの知識を取り入れ、視野を広げ実践での人間理解に活かしていくことであろう。この試みにより、看護が他専門領域と関わる学問であることや、他領域の求める看護の姿は語られている。しかし、その一方で看護から他領域に対する働きかけがみられないのは何故か。看護がただ他の学問を吸収し活かしていくだけでは知識を吸収するのみである。その反対の働きかけも十分に可能ではないか。つまり、他の学問に影響を与えることや、ある面では指導的立場になり得ることもあるといえるだろう。こうした点を考慮していくことが今後の看護にとって重要であり、『季刊総合看護』でさらに取り上げられればと考える点である。

「看護の社会的役割」についての検討

1. 看護の社会的役割 ナイチンゲール、『季刊総合看護』分析より

看護は元来、生活のなかに存在したもので、生きていく上で不可欠な行為であったと考えられる。そして19世紀の科学の発見及び産業の発展とともに、医療も高度化し需要も高まり、看護に対する需要も高まりを見せた。従来、家族機能の中にあつた看護はナイチンゲールをはじめとする先駆者たちの活動を元に、概念整理され教育制度が整えられ新しい専門職業として確立されてきた。現代社会において看護は、家庭生活における役割という枠を超え、社会における専門職として不可欠な役割を担っている。

ナイチンゲールが指摘したように、人間の自然治癒力を高める働きかけをすることは、『季刊総合看護』の分析における生活環境を整え、

QOL保障を重視することを意味するとみてよいのではないか。つまり生活環境を整えQOLを保障していくことが、人間の自然治癒力を高める援助といえるだろう。そしてこのことが、ナイチンゲールの時代においても、現代においても共通する看護の普遍性と考えられる。

ナイチンゲール及び『季刊総合看護』のどちらも、関連した他領域の影響を受けていることは分かったが、具体的にどのような影響を受けているのかは明確にされていない。『季刊総合看護』では、他領域からの学びを通じて多角的な視点を持つと取り組まれてはいる。しかし、看護が他領域とどのような繋がりを持ち、影響を及ぼしているか。また今後どのような取り組みが求められるのかについて触れられてはいない。このことに関して研究を深めることが21世紀の看護課題の一つであろう。そして同時に筆者の研究課題でもある。

以上の考察はいわば仮説であって、「看護の社会的役割」を追究していくためには、仮説を実証するための根拠が必要である。しかしながら、本稿ではそれを論ずるまでには研究が深まってはいないため、今後の研究課題としたい。

2. 今後の課題及び将来展望

個人のQOLが問われる今日、看護は医療にとどまらない、人間の生活を取り巻くあらゆる場で活躍する可能性を見出そうとしている。その一つとして高齢者介護の領域が挙げられる。今日の高齢化は国際的な潮流である。日本において高齢者医療は、医療費の赤字を増加させるものとしてその改革を促進する方向にあり、高齢者介護の場の貧困化を引き起こしている。医療改革における改革の中心は人件費の削減、つまり医療において最大多数を占める看護系職員

の需給見直しであり、人員の削減は高齢者の処遇をさらに悪化させることにつながる危険性がある⁴¹⁾。看護にとって不可欠な自然治癒力を高めるという行為は、患者の身近にいてこそ実現可能なものである。しかし現実には患者と関わる時間がないという状態を引き起こしている。看護が本来の仕事ができない、本質が脅かされている現実に直面している。

こうした現実だからこそ、自然治癒力を高めるという看護の原点に立ち返ることが必要なのではないか。日常の働きかけ一つひとつがかけがえのない生命を護り、人間のよりよい生活を目指す活動である。つまり、社会成員である人間にとって生きていく上で不可欠な役割を看護は担っているのである。このことを認識し現状における矛盾を改善していくことが「看護の社会的役割」を果たすことになるのではないだろうか。

QOLを前提にした健康を護る専門職としての幅広い活動を目指す取り組みの中に、「看護の社会的役割」が実現されると考える。そのため課題として次の事柄を挙げたい。

それは社会生活をも視野に入れた生活環境を整えていくことである。患者個人の気持ちを尊重しQOLを保障する取り組みを実現させるためには、治療環境が社会に開かれていなければならない。そのためには、病院や施設での看護活動はもちろんのこと、人間全体を捉えるための幅広い視野と行動が求められる。生活全般に関わることを視野に入れつつ看護で行うべきこと、そうではなくて他の専門職に委ねたり協力を求めたりした方が懸命であることを整理する。具体的例えば、看護を取り巻く他領域（心理、教育、リハビリテーション、福祉など）との交流を通じ連携づくりをしていくことや、地

域社会での資源を活用する。そうした幅広い視野を持ちつつネットワークを形成し、協働していくことが必要なのではないだろうか。

例えば現在、患者を中心とした医療関連チームでの取り組みがすでに試みられている。そのチームの将来のあり方として、患者を中心とした対等で平等な信頼関係の構築が望まれる。各専門職が信頼という絆で結びついた友好関係を形成することで患者のQOLが保障され、同時に専門職間の連携が実現するのではないか。

看護は看護学を構築しさらに発展させようとしているのであるが、その蓄積を元に他領域と交流を盛んにしていく。共同研究や学習を通じて、他領域について学び人間を多面的に捉える目を養う。そしてさらに、看護から他領域へ発信していくことが今後の看護課題となるのではないか。こうした取り組みにおいて、看護は21世紀を通じて社会に求められ、さらに発展していくのではないのだろうか。

おわりに

ナイチンゲールは今から140年余り前に、『看護覚え書』を著した。そして時代を経てもなお、この書は看護を志し実践及び研究する者に看護とは何かを問いかけている。また、読み返すたびに新たな発見があり、現代看護を問い直すよう心が駆り立てられる。それは、ナイチンゲールが時代を経てもなお変わらない、看護の普遍性を指摘しているからであろう。

しかし、現状はどうであろうか。看護が従来育んできた患者の回復力を高める、働きかけ、ともに育つという本質的なものが後回しにされているのではないか。筆者は、患者の「治したい」「ありのままの生活のなかで生きたい」と

いう気持ちを受けとめ尊重し、実践することが看護の目指すものだと考える。患者の思いを反映させる取り組みを大切にし、環境を改革していく自覚を持つことを看護は求められているのではないか。

今回まとめた「看護の社会的役割」とそのための課題が、今後の研究における基盤の一つとなると考える。看護が近い将来、家族、地域、他専門職といった社会の中での交流を通じてさらなる発展を遂げると予想する。そのような将来を構築していくためには、看護の社会化を目標に実践に基づいた研究を続けていくことが不可欠であり、筆者の研究課題であると感じるのである。さらに掘り下げた検討をしていく必要がある。

本稿を通じて今後の研究課題が明らかになった。加えて、現代看護を分析するためにはさらに幅広い視野からの分析とより深い論考が必要であることを実感した。今後、一步一步研究を積み上げながら真摯に取り組んでいきたい。

注・引用文献

- 1) 看護行政研究会監修『平成14年度版 看護六法』新日本法規, 2002年, 3頁。
- 2) QOLに関しては多くの見解がある。リハビリテーション医学においては、1979年のアメリカ・リハビリテーション学会においてリハビリテーションの目的をADLからQOL (quality of life: 人生の質) に転換する宣言がされたという。これが医学の世界でQOLが大きく取り上げられた最初であるという。これを受けて上田敏はlifeの3側面: 「生命」、「生活」、「人生」の一体化の重要性を論じている(上田, 2002)。また吉川武彦は「『よりよく生きること』簡単に『生きがい』といってもよい」(吉川, 1997)としている。以上より、筆者はQOLとは人間がよりよく生きることであると解釈する。よって看護の領域において患者がその人にとっての生活・生命・人

- 生を尊重しながら身体的・心理的環境を整えていくことがQOLを高める援助として求められると考える。
- 3) 日本看護協会出版会『看護白書』平成12年度版および「日本看護協会事業案内 平成14年版」によると看護技術の向上に対するの対策や方針が示されている傾向が強いと筆者はみる。技術の向上は重要であることは当然であろう。しかし、人間をどうみるかということも同時に議論されていかなければならないのではないか。このことについては、さらに関係資料を収集し内容を吟味し考察を重ねていく必要がある。
- 4) 看護の関連領域のものとして長島伸一『看護覚え書』の現代的意義(『季刊総合看護』2002年1号)5-12頁及び森本芳生『病と関わる思想』明石書店,2003年などがある。また、看護領域においては、薄井坦子及び金井一薫らの研究が進んでいる。
- 5) 金井一薫『ナイチンゲール看護論・入門』現代社,1993年,216頁。
- 6) ナイチンゲールはまず二次感染の起こらない清潔な環境づくりに着手しその結果、戦地病院での死亡率が42.7%から2.2%に激減した。その他回復期に向かった兵士のための学校を建設し教育したり、また憩いの場となる大コーヒー館や図書館を建設したり、本国へ送金のための郵便局を開設するなど福祉にも尽力したという。以上、金井,224-226頁。
- 7) ナイチンゲールは5つの顔を持つという。それは、著述家としての顔、管理者としての顔、統計学者としての顔、看護の発見者としての顔、病院建築家としての顔であるという。どの領域においても優れた評価ができるとしている。以上、ナイチンゲール看護研究所ホームページ(2003年10月29日付。<http://www.nightingale-a.com/fnfive/index.html>)参照。
- 8) F.ナイチンゲール著、薄井坦子・田村真・小玉香津子訳「病人の看護と健康を守る看護」『ナイチンゲール著作集』現代社,1974年,125頁。
- 9) 同掲128頁。
- 10) 同掲139頁。
- 11) 同掲140頁。
- 12) Florence Nightingale, *SICK-NURSING AND HEALTH-NURSING* (Lori Williamson. FLORENCE NIGHTINGALE AND THE BIRTH OF PROFESSIONAL NURSING Volume 1. THOMMES PRESS.1999) p.195
- 13) 秋山智久『社会福祉実践論』ミネルヴァ書房,2000年,21頁。
- 14) フロレンス・ナイチンゲール著、薄井坦子・小南吉彦編『原文看護覚え書 原文看護学選集1』現代社,2001年,1頁。
- 15) 自然の回復過程 Nature's reparative process, 自然の働き Nature's way, 自然の試み Nature's attempt など。以上 Florence Nightingale, *NOTES ON NURSING: What it is, and what is not.* (New edition, revised and enlarged. 1860) 参照。
- 16) リーダーズ英和辞典 第2版, 研究社より, natureには, 自然, 万有; 自然力, 自然の理法; 造物主, 人間の自然の姿, 本来の姿; 現実, 本物; 本性, 本質, 天性, 性質; その他, 本然の力, 肉体的欲求, 生理的欲求などの意味がある。
- 17) 高谷清, 加藤直樹著『障害者医療の思想』医療図書出版社, 1975年, 58. 59頁参照。
- 18) 「QOL研究会」ホームページ(2003年10月29日付。<http://www.q-life.org/spport>)より引用。
- 19) 清水哲郎ホームページ(2003年10月29日付。<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~shimizu/qol/12b.html>)「QOL評価の対象」参照。
- 20) その他の看護系雑誌及び創刊年については、看護学雑誌(1946年), 看護(1950年), 看護技術(1952年), 看護教育(1960年), 看護研究(1968年)などがある。
- 21) メディアリサーチセンター株式会社『雑誌新聞カタログ2003年度版』に基づいて分析したところ, 看護雑誌71冊中, 季刊総合看護の発行部数は第38位である。
- 22) 季刊総合看護編集部「えていとりある 季刊総合看護とはなにか」(『季刊総合看護』第1巻1号, 1966年)3頁。「季刊総合看護」に関して以

- 下のように述べている。「総合看護というのは、制度を変えたり新しい組織をつくらなければできないものではない、ということである。現在のままの、日常の看護の中からも、それは生まれるのである。どのように人間を理解し、どのような看護をするかが問題となる。（中略）総合保健医療、あるいは総合看護は、その対象となる人間を、たんに生物学的・生理学的な視点から捉えるだけでなく、社会学的・心理学的な視点からも見、“全人間”として総合的に把握し、健康のすべてのレベルにたいして責任を果たしていこうという考えから生まれた。こういう考えを骨組にして、臨床の看護の場で肉づけをし、総合的な人間理解のうえにたった看護を築き上げていかなければならない。これはたいへんなことにちがいないが、正しい理論を支柱にした日常の業務の積み重ね以外に方法はないと思う。」
- 23) 同掲。
- 24) 季刊総合看護編集部「編集覚え書」(『季刊総合看護』第18巻4号, 1983年) 116頁参照。
- 25) 大森健一「遊びのすすめ」(『季刊総合看護』1983年第18巻4号, 1983年) 10.16.18頁参照。
- 26) 大森健一他「座談会『看護と遊び』」(『季刊総合看護』第18巻4号, 1983年) 20-30.33頁参照。
- 27) 季刊総合看護編集部「死の床を語りうるもの」(『季刊総合看護』第5巻1号, 1970年) 特集冒頭文, 及び「編集覚え書」(『季刊総合看護』第36巻3号, 2001年) 96頁参照。
- 28) サラ・ロッチ著, 田村真訳「死に行く人のケアー」(『季刊総合看護』第5巻1号, 1970年) 9.10.12頁参照。
- 29) 古庄富美子「私が体験した危篤患者の看護」(『季刊総合看護』第5巻1号, 1970年) 35頁。
- 30) 川上嘉明「高齢者の死にゆく過程をととのえる終末期のケアの視点」(『季刊総合看護』第35巻3号, 2000年) 81頁, 及び4号102頁参照。
- 31) 石垣靖子「ホスピスにおける看護の役割」(A・デーケン, 飯塚眞之編『日本のホスピスと終末期医療』春秋社, 1991年) 97.98頁参照。
- 32) 薄井坦子「看護のための教育学ノート」(『季刊総合看護』第1巻1号, 1966年) 79.80頁参照。
- 33) 同掲。
- 34) 薄井坦子「看護のための教育学ノート(5)」(『季刊総合看護』第2巻1号, 1967年) 46頁。
- 35) 季刊総合看護編集部「編集覚え書」(『季刊総合看護』第18巻3号, 1983年) 124頁。
- 36) 糸賀一雄「自己実現の教育」(『季刊総合看護』第4巻2号, 1969年) 71頁。
- 37) 井口加代子「講演録『命の大切さを教えてくれた, びわこ学園の園生たち』」(『季刊総合看護』第20巻2号, 1995年) 50頁参照。
- 38) 田口ヨウ子「脳性マヒをもつ子どもの看護の端緒として」(『季刊総合看護』第8巻1号, 1973年) 5-21頁要約, 参照。
- 39) 同掲, 43頁。
- 40) 若松澄子「重症心身障害児看護の日々 くり返し重ねられていく重み」(『季刊総合看護』第11巻2号, 1976年) 10.15.18頁参照。
- 41) 厚生労働省は看護職員需給見通しにおいて2005年度には需給がほぼ均等するという(「病院が『付き添い』要求」朝日新聞2002年11月28日より)。また, アメリカにおいて看護職員の不足により患者死亡率の上昇が実証されているという(阿部俊子「緊急報告『看護人員不足は生命に関わる』週間医学界新聞2002年11月25日)。以上より, 政府の見解と現場での見解は相反しているが, 現場において看護職員不足は深刻な問題であるといえるだろう。

参考文献

- 糸賀一雄『この子らを世の光に 自伝・近江学園二十年の願い』柏樹社, 1965年。
- 糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス, 1968年。
- 糸賀一雄著作集刊行会編『糸賀一雄著作集』日本放送出版協会, 1982年。
- 上田敏編『リハビリテーションの理論と実際』ミネルヴァ書房, 2002年。
- 氏平高敏他編『健康づくりと支援活動...健康日本への視点』法律文化社, 1999年。
- 薄井坦子『科学的看護論 第3版』日本看護協会出版, 1997年。
- 薄井坦子編『ナイチンゲール言葉集』現代社, 1995

- 年。
- C. ウーダム・スミス著，武山満智子・小南吉彦訳『フロレンス・ナイチンゲールの生涯上・下巻』現代社，1981年。
- 加藤直樹，高谷清編『変革の医療』鳩の森書房，1971年。
- 加藤尚武，加茂直樹編『生命倫理学を学ぶ人のために』世界思想社，1998年。
- 金井一薫『ケアの本質 看護と福祉の接点とその本質』現代社，1998年。
- 金井一薫『ナイチンゲール看護論・入門』現代社，1993年。
- 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房，1980年。
- 神谷美恵子『こころの旅』日本評論社，1974年。
- 神谷美恵子『人間をみつめて』みすず書房，1980年。
- I. ガルドストーン著，中川米造訳『社会医学の意味』法政大学出版局，1973年。
- 川上武『医者と患者の間』毎日新聞社，1977年。
- 川上武『医療と福祉 現代資本主義と人間』勁草書房，1973年。
- 川上武『現代日本医療史 開業医制の変遷』勁草書房，1965年。
- 看護史研究会『派出看護婦の歴史』勁草書房，1983年。
- 『季刊・季刊総合看護』1966-2002，現代社。
- キェルケゴール著，斎藤信治訳『死に至る病』岩波文庫，1939年。
- 基礎経済科学研究所編『人間発達の経済学』基礎経済科学研究所，1982年。
- アンドレ・グアゼ著，森岡恭彦訳『医の倫理とは明日の医療と哲学』産業図書，2000年。
- 厚生省大臣官房統計情報部編『人口動態統計』平成3年（1991年）。
- Z. コープ著，三輪卓爾訳『ナイチンゲールと六人の弟子』医学書院，1972年。
- 「高齢化に関する国際行動計画及び高齢者のための国連原則」国際連合，1998年。
- 国民医療・医療労働研究会編『看護労働の未来』労働旬報社，1985年。
- 小林司『「生きがい」とは何か 自己実現へのみち』NHKブックス，1989年。
- 島崎敏樹『生きるとは何か』岩波書店，1974年。
- 杉田勇，平山正実編著『インフォームド・コンセント 共感から合意へ』北樹出版，1994年。
- ルーシー・セーマー著，湯楨ます訳，『フロレンス・ナイチンゲール』メジカルフレンド社，1987年。
- 全国准看護婦（士）看護研究会編『准看護婦（士）白書』桐書房，1994年。
- 第1回全国障害者医療問題合宿学習会「障害者医療の発展をめざして」全国障害者問題研究会，1971年12月26日。
- 高谷清，加藤直樹『障害者医療の思想』鳩の森書房，1975年。
- 田中昌人・清水寛編『発達保障の探究』全国障害者問題研究会出版部，1987年。
- アルフォンス・デーケン，飯塚眞之編『＜生と死を考えるセミナー第4集＞日本のホスピスと終末期医療』春秋社，1991年。
- Florence Nightingale, *NOTES ON NURSING: What it is, and what is not.* (New edition, revised and enlarged. 1860) (フロレンス・ナイチンゲール著，薄井坦子・小南吉彦訳『原文看護覚え書 原文看護学選集1』現代社，2001年として発行されている原文である。)
- フロレンス・ナイチンゲール著，湯楨ます他訳『看護覚え書』現代社，1983年。
- フロレンス・ナイチンゲール著，薄井坦子・田村真・小玉香津子訳「病人の看護と健康を守る看護」(『ナイチンゲール著作集』現代社，1974年) 125-155頁。
- Florence Nightingale, *SICK-NURSING AND HEALTH-NURSING* (Lori Williamson. FLORENCE NIGHTINGALE AND THE BIRTH OF PROFESSIONAL NURSING Volume 1. THOMMES PRESS, 1999) 訳として以下の文献を参照した。薄井坦子，田村真，小玉香津子訳「病人の看護と健康を守る看護」(『ナイチンゲール著作集』現代社，1974年) 125-155頁。
- フロレンス・ナイチンゲール著，薄井坦子他訳『看護小論集』現代社，2003年。
- 長田浩『医療・看護の経済論』勁草書房，2002年。
- 新村拓『死と病と看護の社会史』法政大学出版局，1989年。

- 二木立『21世紀初頭の医療と介護』勁草書房，2001年。
- 日本発達障害学会「国際セミナー『世界の障害者福祉の動向 高齢障害者の地域ケアとQOL』」2002年12月24日発行。
- 二宮厚美『生きがいの構造と人間発達』労働旬報社，1994年。
- 日本看護協会編『看護白書』昭和46年度版～平成14年度版，日本看護協会出版会。
- 根元博司編『援助困難な老人へのアプローチ』中央法規出版，1990年。
- 野島良子『看護論』へるす出版，1984年。
- 野村拓『医療と国民生活 昭和医療史』青木書店，1981年。
- ジョージ・バターワース，マーガレット・ハリス著，小山正・神土陽子・松下淑訳『発達心理学の基本を学ぶ 人間発達の生物学的・文化的基盤』ミネルヴァ書房，1997年。
- 原田勝正『昭和の歴史 別巻 昭和の世相』小学館，1983年。
- T.ハワード，J.リフキン著，磯野直秀訳『遺伝工学の時代 誰が神にかわりうるか』岩波現代選書，1979年。
- 平井俊策・江藤文夫編著『老年者のリハビリテーション よりよいQOLのために』株式会社ワールドプランニング，1997年。
- V.E.フランクル著，霜山徳爾訳『フランクル著作集1 夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房，1961年。
- アドルフ・ポルトマン著，高木正孝訳『人間はどこまで動物か 新しい人間像のために』岩波新書，1961年。
- 久繁哲徳「看護の有効性 ナイチンゲールが問いかけたもの」(『季刊総合看護』，1988年4月号) 38-44頁。
- 日野秀逸『医療の基礎理論』労働旬報社，1983年。
- 日野秀逸『保険活動の歩み 人間・社会・健康』医学書院，1995年。
- 日野秀逸他『人間にとって医学とは何か』日本出版社，1995年。
- 日野原重明『<ケア>の新しい考えと展開』春秋社，1999年。
- 日野原重明，斎藤武監修『イエッツィ 医の倫理 いのちを考える拠点』医学書院サウンダース，1985年。
- ルース・R・フェイドン，トム・L・ピーチャム著，酒井忠昭，秦洋一共訳『インフォームド・コンセント 患者の選択』みすず書房，1994年。
- 星野一正『医療の倫理』岩波新書，1991年。
- 山崎喜比古編『健康と医療の社会学』東京大学出版会，2001年。
- UNDP人間開発報告書2000『人権と人間開発』国際協力出版会，2000年。
- 湯槇ます監修『ナイチンゲール著作集 第二巻』現代社，1974年。
- 湯槇ます・小玉香津子・薄井坦子・鳥海美恵子・小南吉彦編訳『新訳・ナイチンゲール書簡集』現代社，1977年。
- 吉松和哉『医者と患者』岩波書店，2001年。
- 米山桂三『看護の社会学』未来社，1981年。
- 歴史科学協議会編『日本現代史 体制変革のダイナミズム』青木書店，2000年。
- 渡辺文夫・山崎久美子・久田満『医療への心理学的パースペクティブ』ナカニシヤ，1994年。

A Study of the Social Role of Nursing

— Through the Analysis of Nightingale and Comprehensive Nursing —

TAKEBU Sachiko *

Abstract: In this paper, elaborating on Florence Nightingale's concept of nursing and analysis of the journal *Comprehensive Nursing*, Quarterly, I consider the social role of nursing in modern society and make clear the relevance of the subject for society in the 21st century. From this analysis I establish that the social role of nursing is to preserve people's lives by supporting the human natural capacity to recover (the "effort of nature to remedy"). I discuss the need for fluid relationships between nursing and its related professions in order to fulfill its role. And this also requires the promotion of the relationship between researchers and academia in the area of psychology, education, welfare and other related specialties.

Keywords: Florence Nightingale, social role, quality of life, effort of nature to remedy

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University